

大槌の歴史

大槌氏をめぐるナゾ第4回

田中館の登り口には、平成二年に吉里吉里青年会が設置した「しろさか」の標柱が立っています。たしかに花崗岩の風化した白色がかった坂路ですが、吉里吉里から浪板方面にかけては、同様の白色でサラサラした地質の露出している所が多く、このみが特に「白坂」である理由はありません。やはり「城坂」と理解するべきなのでしょう。

伊達勢の吉里吉里浦への攻伐は、数次におよんだともいわれますが、戦いの中で芳賀氏の長男勝田が戦死したことは前回に記しました。その後次男の本波は名も惣兵衛（惣助ともいう）と改め、芳賀氏を継ぎます。同氏一門の主は代々惣兵衛あるいは惣助を名乗っているのです。

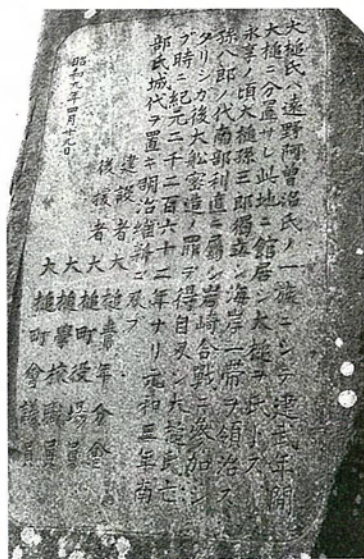
芳賀氏の初代がいつ吉里吉里に住み着いたかという点については、本吉郡（現宮城県）山田村にあつた細越館主が、文禄元年（一五九二）に移住して来て、田中館主になったとする研究結果もあります。しかし実はそれより以前の天正十一年（一五八三）の時点で、すでにこの一円において同氏が小土豪として成立していた可能性を指摘しておきたいと思っています。

すなわち『系胤譜考』『参考諸家系図』などという本を見ますと、この年閉伊郡津軽石の拂川館勢と同郡千徳館勢との激しい攻防戦がありました。津軽石方の主な家臣たち、拂川大炊介・藤畑掃部など数人の者と共に吉利惣助も「此の戦いに遇わずして諸方へ分散す」と記されています。

なお芳賀氏文書「由緒承伝之覚」には次のように記されているので、一応紹介しておきます。

「往古阿部（頼時 貞任ら）御退治の頃、八幡太郎様奥州へ御下向遊ばされ候節、右御供の内、奥州御仕置のため御残し遊ばされ候子孫に御座候」

さて狐崎城や芳賀氏の諸館が、伊達勢の侵略をうけながら、領主



「大槌城址」碑の碑文

南部氏も直接の知行主である大槌氏も、戦った記録も対抗した言い伝えも残されておりません。その辺の事情はどうであったかというのが問題でした。その解答は、すでに述べてきた中にあるのです。慶長六年のことといえますから、大槌孫八郎は南部氏の侍大將として、和賀郡の岩崎合戦に参陣して留守だったのです。その留守を狙った伊達氏の侵略行動であった

のです。いえ、その岩崎合戦というのも、実は伊達氏が武將を派遣し、物資を提供し裏工作をして引き起した侵略作戦だったのですから、大槌氏が出張の間に海辺通りをも切り取るという、一連の侵略作戦のうちであったわけですね。「岩崎御出陣人数定め」には次のように記録されています。

八百石大槌孫八郎 此下六十一人 内馬上三十騎 右は南北閉伊の郷士共を引率

す、故に馬上雑兵ともに多し（南部叢書による）ここに記された大槌氏の勢力はまことに拔群のものでした。例えば同記録に並んで記されている侍大將の大湯五兵衛は、二千石の身代でも部下四十六人、内馬上三騎にしかすぎないのです。

そして大槌氏の隊も、直接激戦にかかわっていきましました。現山田町田の浜の佐々木家の先祖も、大槌氏の部下として参陣し、戦場に斃れた一人でした。同家系図中には次のような記載が見られます。

甚之助 永禄六年生れ 慶長五年岩崎陣に出陣して戦死す 三十八（才）

岩崎陣 慶長五年和賀郡多田主馬忠親、和賀岩崎城に叛し、同六年三月三日南部二十七代利直四千五百七十一人を率ひて之れを征し、四月二十六日平定せり。此の時甚之助、大槌孫八郎に従ひ六十一人にて出陣せり

南部、和賀両軍の攻防を繰返すこと二十余日におよび、戦いは長びくかと考えられた四月二十六日夜、たまたま大風となり、南部軍は城の四方から葦束に火をつけて投げ入れ、また火矢を放つて

火責めを敢行したのです。岩崎城内は大火となり、多田忠親は総攻撃をうけてついに城を支えるあたわず、伊達氏を頼って逃れ去ったのでした。

岩崎城落城ののち、大槌孫八郎は野田氏、江刺氏、栗谷川氏と共に同城普請奉行（仮の城代ともいう）となつてしばらく居残りしました。戦乱に荒廃した岩崎城と周辺村落の、治安と再建が任務であったものと思われまします。

なお大槌氏について「奥州和賀郡岩崎一揆由来並びに勢揃い」には次のように記されています。 百六十一人 八百石大槌孫八郎 槍二本 鉄砲五挺 弓十張 手鎌二十挺 幕紋藤巴 是れは東閉伊侍残らず引具し 出る

大槌氏に従った将兵の員数が、先の「御出陣人数定め」では六十一人となっており、この「由来並びに勢揃い」では百六十一人としている大チガイがあるのです。



文・町文化財保護審議会委員 花石公夫さん